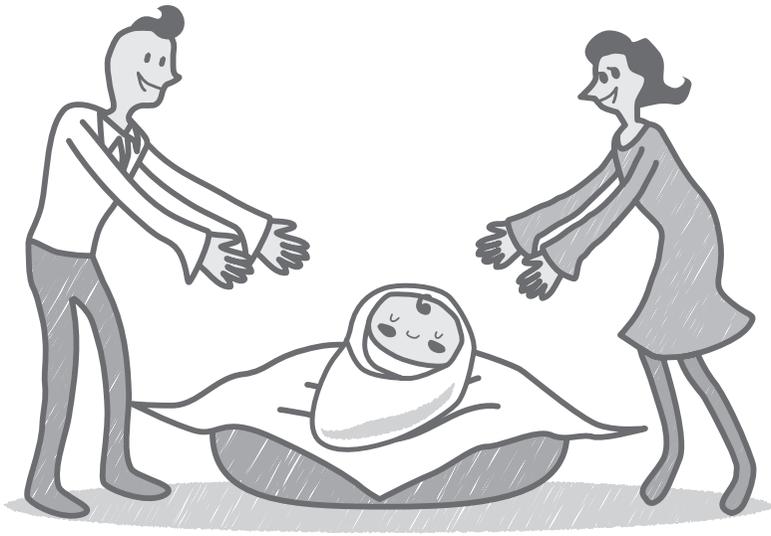


第2章

養育態度と子育て意識

持田 聖子



この節では、育児期の妻・夫の養育態度についてみていきたい。また、妻・夫が子ども時代に自分の母親・父親から受けた養育についての評価もみていきたい。

● 子どもへの接し方～妻も夫も温かい態度で子どもに接している～

はじめての子どもに対して、妻・夫はどのような接し方をしているのだろうか。本調査では、5つの質問について、それぞれ「あてはまる」から「あてはまらない」までの5段階で回答してもらった。図2-1-1は、育児期妻の回答結果をまとめたものである。「あてはまる」の回答率でみると、「○○ちゃんに『おはよう』、『ありがとう』などあいさつの声かけをしている」90.2%、「○○ちゃんをしっかりしつけるのは親の役目だと思う」77.0%、「○○ちゃんを傷つけるような言動をした場合、私は素直に○○ちゃんに『ごめんね』と言える」70.4%という、しつけやあいさつに関する設問には、高い回答率を示している。「○○ちゃんといろいろなことを話すのを喜んでいる」59.4%、「○○ちゃんに温かくやさしい声で話しかけている」45.7%という、子どもへの接し方についての項目は、先に述べた3項目と比較すると、低くなっている。しかし、「あてはまる」と「ややあてはまる」でみた場合は、いずれの項目についても8～9割の回答率で、非常に肯定的な結果となった。

子どもの年齢別に接し方をみると、差が認められたのは「○○ちゃんに温かくやさしい声で話しかけている」で、0歳95.1%（「あてはまる」＋「ややあてはまる」で比較）、1歳82.7%、2歳73.3%と、0歳児の母親のあてはまるという回答率ももっとも高く、子どもの年齢が上がるにつれて下がっていく（図2-1-2）。母親自身の年齢グループによる接し方の違いは、差がみられなかった。

図2-1-3は、育児期夫の回答結果である。いずれも妻と傾向は同じで、質問すべてに非常に肯定的な回答結果になっている。子どもの年齢別に差が認められたのは、「○○ちゃんに温かくやさしい声で話しかけている」で（図2-1-4）、0歳95.2%（「あてはまる」＋「ややあてはまる」で比較）、1歳89.3%、2歳87.7%と、0歳児の父親の回答率ももっとも高く、子どもの年齢が上がるにつれて下がっていく。この傾向は妻と同様であるが、その下がり方は妻と比べてゆるやかである。回答者全体での結果でも、夫のほうが妻よりも、温かくやさしい声での話しかけの回答率が14.1ポイント高い（「あてはまる」のみで比較）。

図2-1-1 子どもへの接し方（育児期妻）

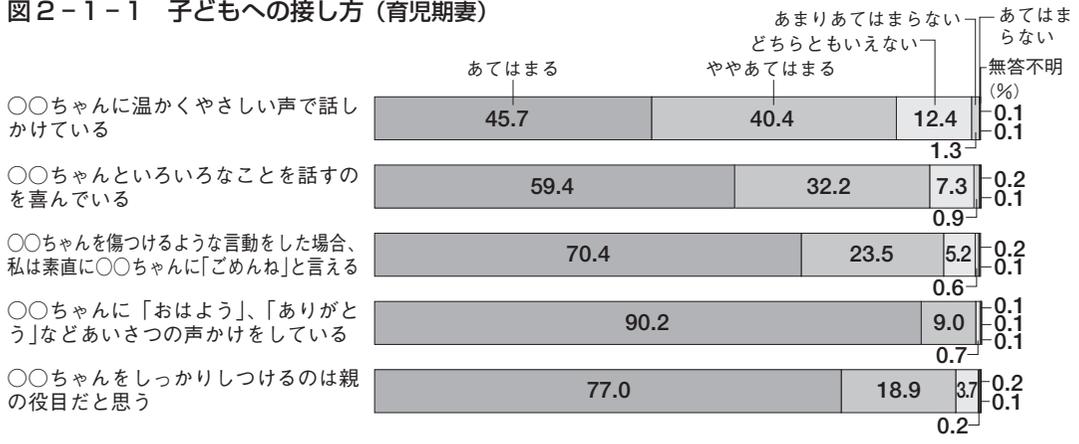
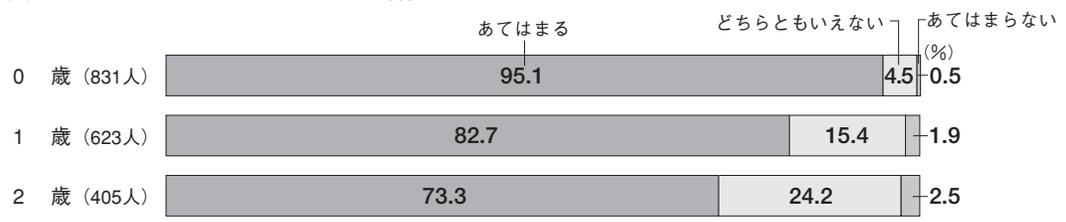


図2-1-2 温かくやさしい声で話しかけている（育児期妻、子どもの年齢別）



注1) 「無答不明」は除く。

注2) あてはまる＝「あてはまる」＋「ややあてはまる」、あてはまらない＝「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」。

図2-1-3 子どもへの接し方（育児期夫）

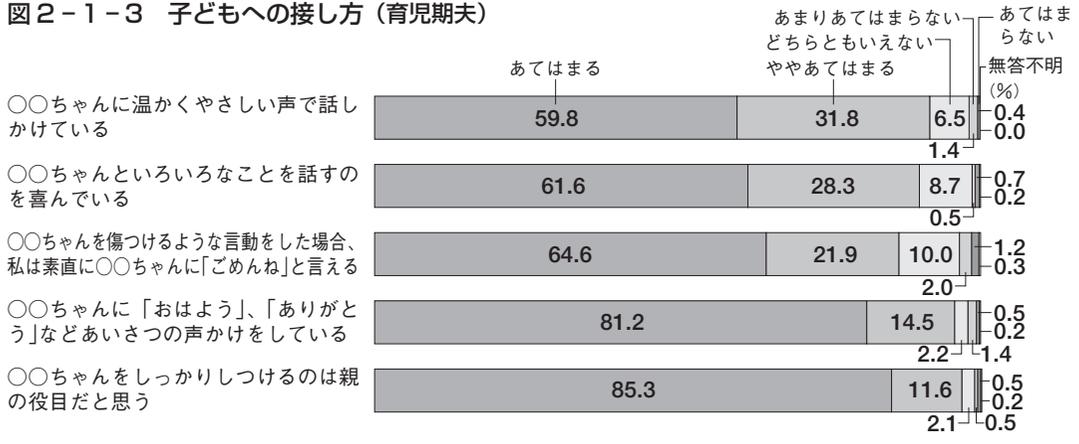
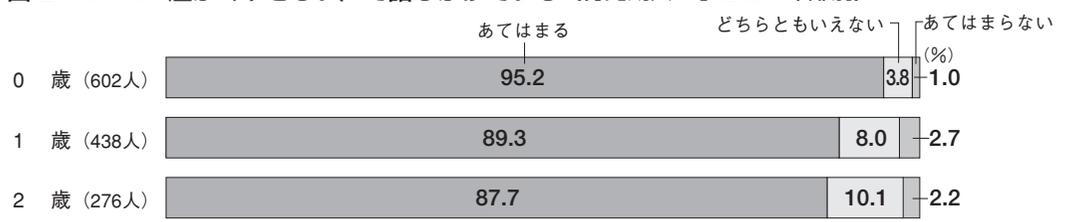


図2-1-4 温かくやさしい声で話しかけている（育児期夫、子どもの年齢別）



注1) 「無答不明」は除く。

注2) あてはまる＝「あてはまる」＋「ややあてはまる」、あてはまらない＝「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」。

●妻・夫自身の被養育経験

子どもに対して、温かな子育てぶりがみとれる育児期妻・夫であるが、彼ら自身の被養育経験はどのようなものだったのだろうか。本調査では、育児期妻・夫の母親・父親の養育態度に関する4項目について、それぞれ「あてはまる」から「あてはまらない」の5段階で回答してもらった（注：「親はいない」の回答者は除く）。

図2-1-5は、育児期妻の母親・父親の養育態度をまとめたものである。母親については、「いつもやさしく、温かい愛情を持って接してくれ、私のことをよく理解してくれていた」がもっとも多く、70.7%があてはまる（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）と回答している。ついで「しつけには厳しかったが、いつも私の意見に耳を傾けてくれた」が55.9%と続く。育児期妻の父親の養育態度については、「いつもやさしく、温かい愛情を持って接してくれ、私のことをよく理解してくれていた」という評価が54.7%ともっとも多かった。「しつけには厳しかったが、いつも私の意見に耳を傾けてくれた」は38.8%と、

母親に比べて17.1ポイント低い。また、父親については、この項目にあてはまらない（「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」）という人も32.9%と3割以上いた。

「しつけに甘く、私の言うことは何でも聞いてくれた」という養育態度は、妻の母親・父親ともに、「あてはまる」＋「ややあてはまる」でいずれも10%前後と低かった（母親7.5%、父親12.6%）。「しつけに大変厳しく、私の言い分を聞いてくれなかった」という養育態度の親も少なく、「あてはまる」＋「ややあてはまる」でも、母親11.2%、父親13.3%であった。

育児期夫については、どうだろうか。図2-1-6は、夫の被養育経験をまとめたものであるが、傾向は妻と同様である。たとえば父親は娘に甘い、母親は息子に甘いなど、親の性別と子どもの性別による養育態度の違いはみられなかった。夫の父親も、「しつけには厳しかったが、いつも私の意見に耳を傾けてくれた」に「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」と回答した率が32.6%と3割以上いた。

図2-1-5 自分の母親・父親から受けた養育経験（育児期妻）

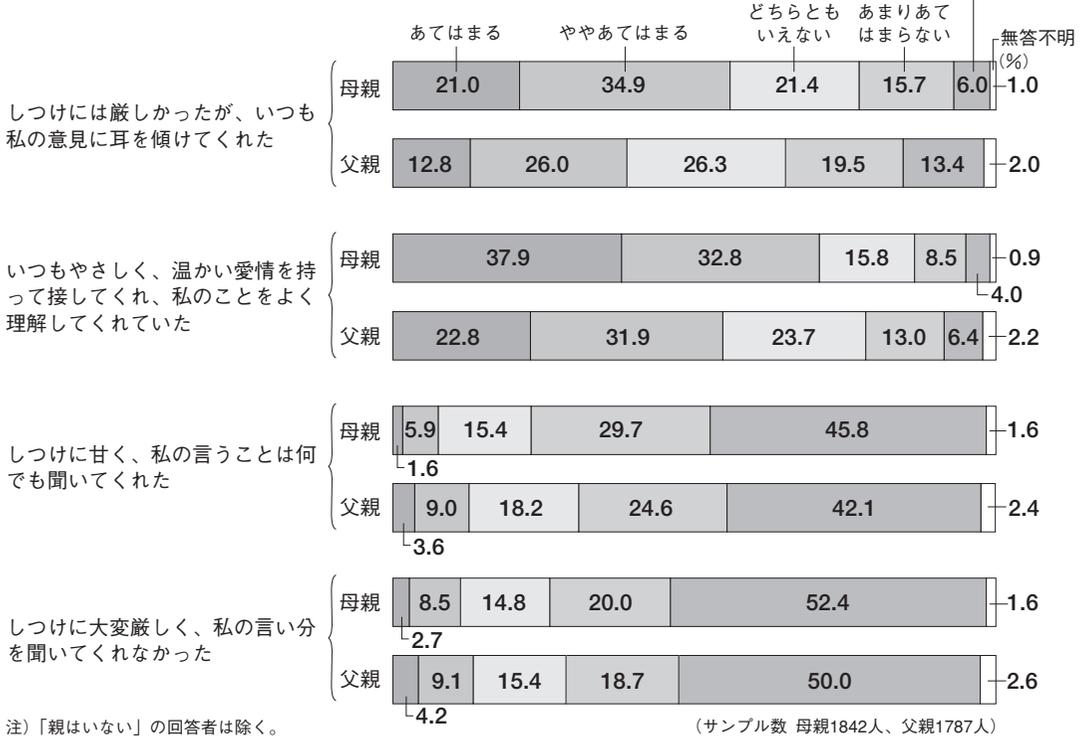
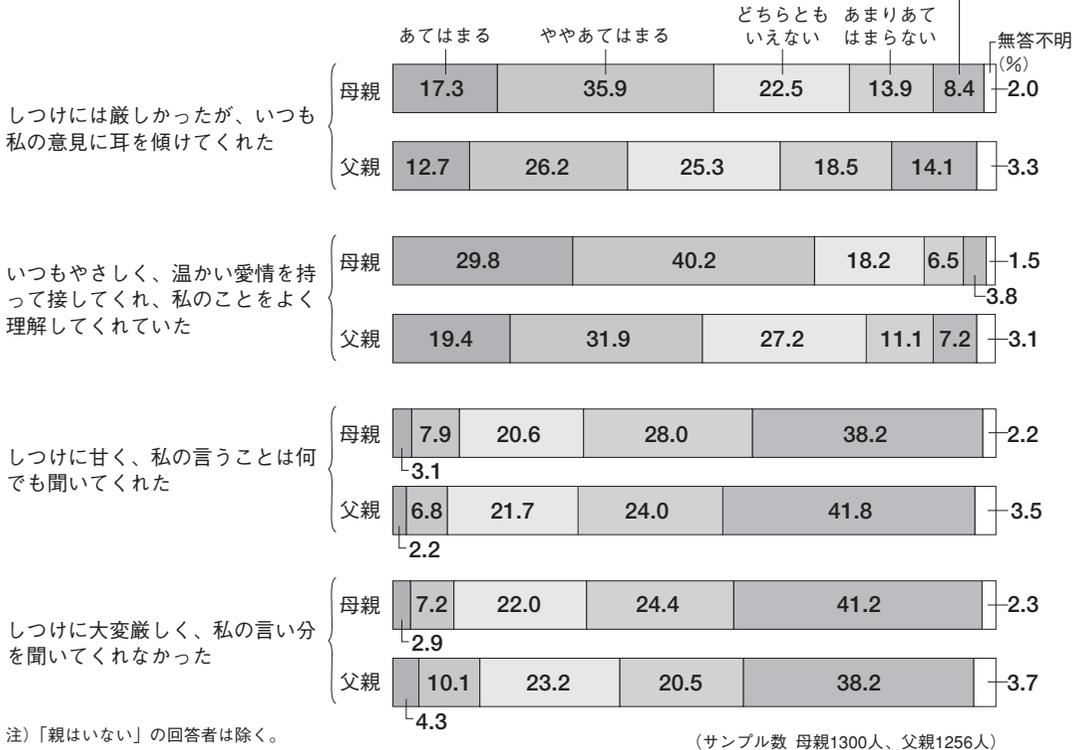


図2-1-6 自分の母親・父親から受けた養育経験（育児期夫）



この節では、育児期の妻・夫にとって、はじめて直面する子育ての中で経験していること、感じているストレスについて取り上げる。

●子育て生活とストレス

本調査では、育児期妻・夫に、子どもとのコミュニケーションや、住居・近隣の環境、自分1人や夫婦で過ごす時間の有無など、乳幼児のいる生活の中で、ストレスになり得る12項目について経験の有無をきき、「経験したことがある」と回答した項目に対しては、それぞれ「非常にイライラする」から「イライラしない」までの5段階で感じているストレスの強度をきいた。図2-2-1は、育児期妻・夫の「経験したことがある」割合とストレスを感じている割合（「非常にイライラする」＋「ややイライラする」）を、妻の経験率の高いものから順に並べたものである（折れ線グラフは経験率、棒グラフは経験者のうちストレスを感じている人の割合を示している）。

まず、子育て生活の中での経験について、簡単にまとめてみたい。12項目のうち、育児期妻が「経験したことがある」と回答したものの上位3項目は、「あなたがおもちゃや散らかっているものを片付け続けている」93.0%、「子どもに遊んでとせがまれる」80.4%、「自分のための時間を確保するのが難しい」74.7%である。育児期夫も上位3項目は妻と同じだが、すべて妻よりも割合は低い（「片付け」75.3%、「遊んでとせがまれる」76.4%、「自分のための時間の確保」61.1%）。

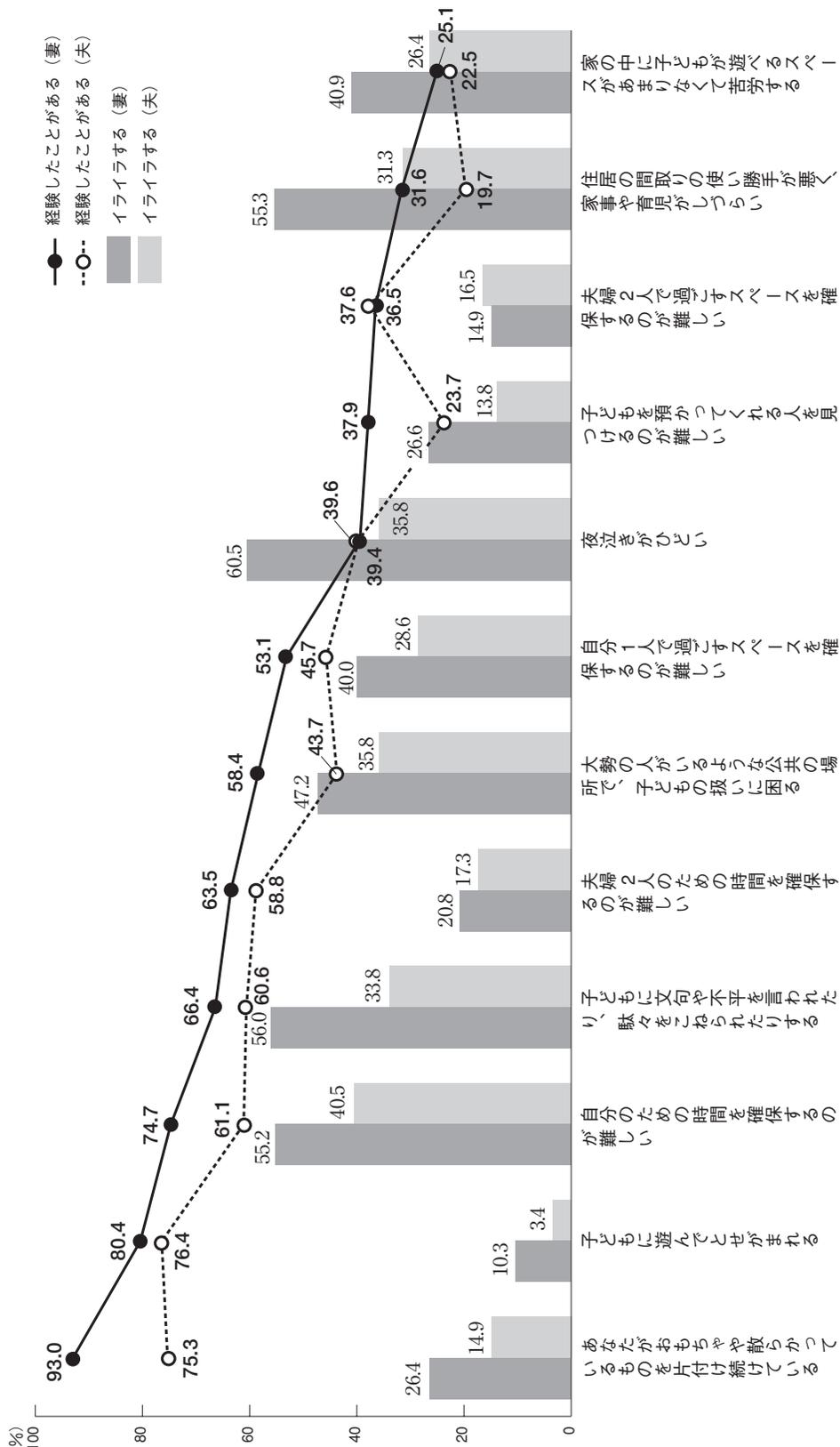
育児期妻が子育て生活の中で経験している割合が高く、ストレスも強く感じていることはどのような項目だろうか。経験率が高く、経験者のうちストレスを感じている人の割合が高い項目は、「自分のための時間を確保す

るのが難しい」（経験率74.7%、ストレス55.2%）と「子どもに文句や不平を言われたり、駄々をこねられたりする」（経験率66.4%、ストレス56.0%）であった。「自分のための時間の確保」についてさらに細かく分析すると、ストレスを感じている人の64.3%が無職（専業主婦）であることがわかった。子どもと接する時間が長いと、ストレスがたまりやすいのかもしれない。時には子どもを預けるなどして、自分のための豊かな時間を持つような環境が必要なのではないか。

その他、「大勢の人がいるような公共の場所で、子どもの扱いに困る」（経験率58.4%、ストレス47.2%）、「自分1人で過ごすスペースを確保するのが難しい」（経験率53.1%、ストレス40.0%）も、4割以上の妻がストレスを感じていると回答している。

経験したことがある割合は高いが、ストレスが低いのは、「あなたがおもちゃや散らかっているものを片付け続けている」（経験率93.0%、ストレス26.4%）、「子どもに遊んでとせがまれる」（経験率80.4%、ストレス10.3%）、「夫婦2人のための時間を確保するのが難しい」（経験率63.5%、ストレス20.8%）である。子どもが幼くて、まだ自分でおもちゃや衣類などの片付けが十分にできない時期は、親が片付けることは当然だと思うのか、片付け続けることをストレスとはあまり感じていないようである。また、子どもとの関係でも、子どもに文句や不平を言われたり駄々をこねられたりすることにはストレスを感じる人が多いが、遊んでほしいとせがまれることに対しては、ストレスとを感じる人は少ない

図2-2-1 子育て生活での経験とストレス（育児期妻・夫）



注) イライラする＝「非常にイライラする」＋「ややイライラする」(「経験あり」の人のみ)。

ことがわかる。

経験したことがある割合は低い、経験している人のストレスが高いものは、「住居の間取りの使い勝手が悪く、家事や育児がしづらい」（経験率31.6%、ストレス55.3%）と「夜泣きがひどい」（経験率39.4%、ストレス60.5%）である。夜泣きは、妻がストレスを感じる割合としては、12項目中第1位である。睡眠を子どもの泣き声でさえぎられ、おさまるまであやさなければならないこと、夜泣きがいつまで続くかわからない日々は、妻にとって大きなストレスになっているのだろう。夜泣きについては、子どもの年齢別に経験者のストレスを比較してみると、0歳59.0%、1歳65.7%、2歳56.2%と、1歳がやや高くなっていったものの、顕著な差はみられなかった（後述の図2-2-3を参照）。「経験したことがあるかどうか」ときいているので、過去の経験も含まれているのかもしれない。

経験したことがある割合が低く、経験者のストレスも低いものは、「子どもを預かってくれる人を見つけるのが難しい」（経験率37.9%、ストレス26.6%）、「夫婦2人で過ごすスペースを確保するのが難しい」（経験率36.5%、ストレス14.9%）であった。

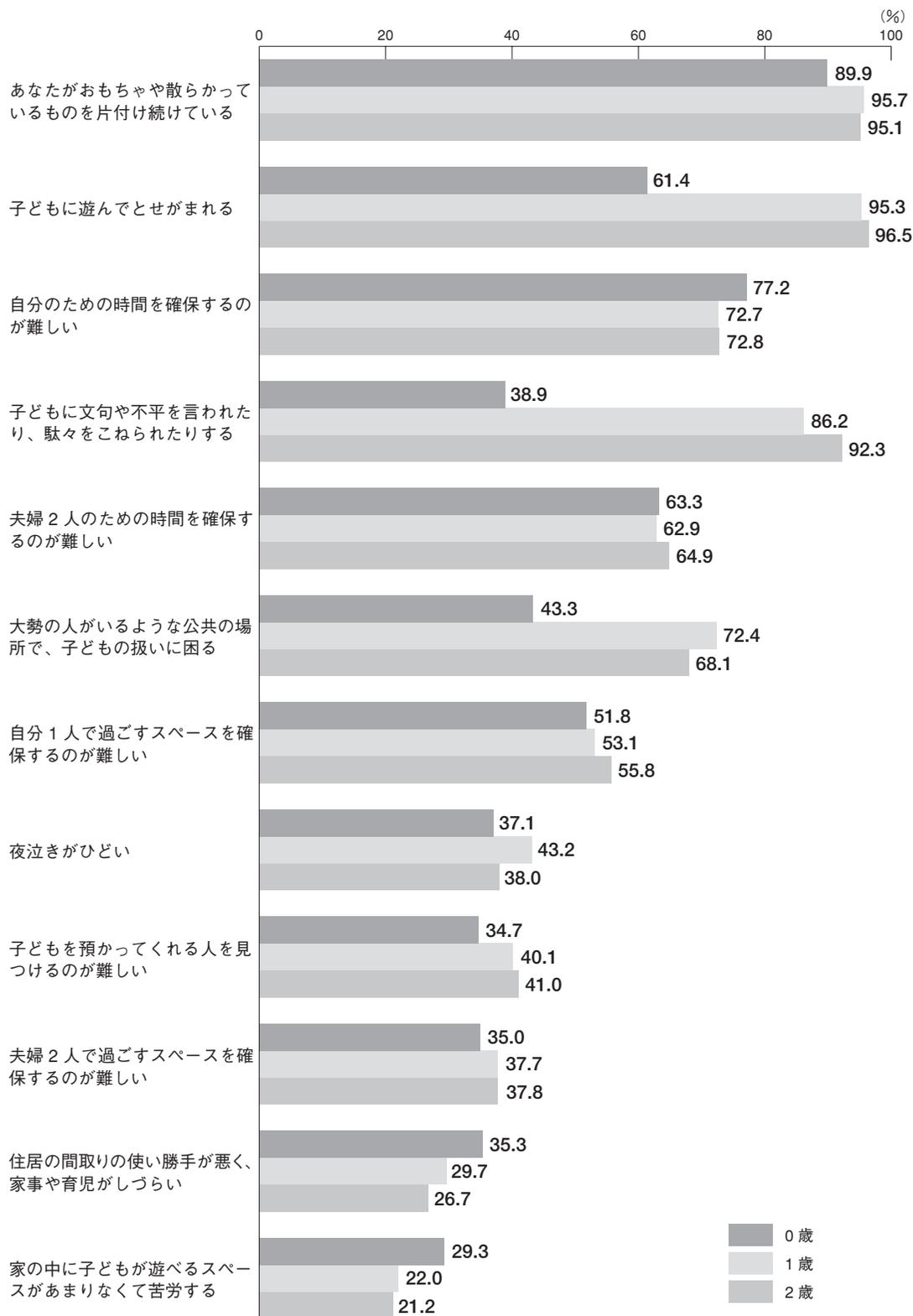
育児期夫については、12項目中、経験率は、「夜泣きがひどい」「夫婦2人で過ごすスペースを確保するのが難しい」という項目以外は、妻に比べて低く、ストレスを感じる率も、「夫婦2人で過ごすスペースを確保するのが難しい」（妻14.9%、夫16.5%）以外は妻より低い（図2-2-1）。また、12項目中、「経験したことがある」と回答した夫のうち、ストレスを感じていると回答する率が50%を超えるものはない。ストレスを感じると回答する率ももっとも高いものは、「自分のための時間を確保するのが難しい」（40.5%）である。これは経験率も61.1%と全体で第3位であるので、育児期夫がもっとも強くストレスを感じていることだといえるだろう。それでも経験者の約4割と半数以下である。また、夫の場合、経験率が妻とほぼ同じでも、そのことに

対してストレスを感じる割合は、妻と比べて低い傾向がある。たとえば、「夜泣きがひどい」は、経験率は妻・夫ともに約39%とほぼ同じだが、ストレスを感じる人の割合は妻の60.5%に対して、夫は35.8%と24.7ポイント低い。「子どもに文句や不平を言われたり、駄々をこねられたりする」も、妻の66.4%、夫の60.6%が経験しているが、ストレスを感じる人の割合は妻56.0%、夫33.8%と22.2ポイント低い。「家の中に子どもが遊べるスペースがあまりなくて苦勞する」は、経験している人は妻25.1%、夫22.5%と、共に低いが、経験者がストレスを感じる割合は、妻40.9%、夫26.4%である。夫は仕事で忙しく、十分に子どもと触れ合う時間が少ない人が多いため、夜泣きや子どもに文句を言われたり駄々をこねられたりするものの対応を妻に任せることも実際は多く、ストレスになりにくいのだろうか。また、家庭内で子どもと一緒にいる時間・頻度が高い妻のほうが、家の中で子どもが遊ぶスペースがないことや、「住居の間取りの使い勝手が悪く、家事や育児がしづらい」（妻>夫で経験者のストレス率に24.0ポイントの差）ことなど住居の使い勝手に関して、夫よりもストレスを感じる人の割合が高い。

●子どもの発達・成長とストレス

12項目について、子どもの年齢によって、育児期妻が「経験したことがある」と回答する割合をまとめたものが図2-2-2、「経験したことがある」と回答した人がストレスを感じる割合をまとめたものが図2-2-3である。「子どもに文句や不平を言われたり、駄々をこねられたりする」（ストレス：0歳38.6%、1歳58.8%、2歳67.7%）、「大勢の人がいるような公共の場所で、子どもの扱いに困る」（ストレス：0歳26.8%、1歳54.0%、2歳64.2%）、「あなたがおもちゃや散らかっているものを片付け続けている」（ストレス：0歳10.3%、1歳29.0%、2歳53.9%）、「子どもに遊んでとせがまれる」（ストレス：0歳5.9

図2-2-2 子育て生活での経験（育児期妻、子どもの年齢別）



注) 「経験したことがある」の回答率。

%、1歳10.4%、2歳15.9%)という、子どもとのかかわり合いについての項目は、経験率もストレスを感じる割合も0歳児の母親がもっとも低く、ストレスは1歳、2歳で高くなっている。いずれも、子どもの年齢が1、2歳になるにつれて、言葉やコミュニケーション能力、身体機能が発達して行動範囲が広がることで、さまざまな生活シーンで親がストレスを感じる場面が増えることが推測される。まだ社会のルールを理解できない年齢の子どもを抱える親たちをあたたかく見守る寛容さも今の社会には必要なのではないだろうか。子育て支援の方法も、子どもの成長の変化に応じた工夫も必要ではないか。また、上記4項目と比較すると子どもの年齢による差は小さいが、「自分のための時間を確保するのが難しい」(ストレス：0歳50.6%、1歳

58.5%、2歳61.2%)、「自分1人で過ごすスペースを確保するのが難しい」(ストレス：0歳36.1%、1歳40.2%、2歳48.0%)という母親自身のための時間と空間を持ちにくいことに対するストレスも、子どもの年齢が上がると比率が上がっていく。この2項目の経験率は子どもの年齢による差はあまりみられない。子どもが0歳から2歳の時期は、まだ自分でできることが少なく、生活全般にわたり親の関与がもっとも必要な時期である。この3年間の育児の主たる担い手である妻は、自分の時間やスペースを持ちにくいことにストレスを感じている。前述したように、妻自身が、自分のための時間を持つことは、ストレスを軽減し、楽しく育児に向き合うためには重要なことである。

図2-2-3 子育て生活でのストレス（育児期妻、子どもの年齢別）

	年齢 (人数)	イライラする		イライラしない (%)	
		どちらともいえない			
あなたがおもちゃや散らかっているものを片付け続けている	0歳 (746人)	10.3	15.5	74.1	
	1歳 (593人)	29.0		25.3	45.7
	2歳 (384人)	53.9		21.4	24.7
子どもに遊んでとせがまれる	0歳 (507人)	5.9	19.3	74.8	
	1歳 (588人)	10.4	28.4		61.2
	2歳 (391人)	15.9	31.5		52.7
自分のための時間を確保するのが難しい	0歳 (638人)	50.6		26.0	23.4
	1歳 (453人)	58.5		22.5	19.0
	2歳 (294人)	61.2		25.2	13.6
子どもに文句や不平を言われたり、駄々をこねられたりする	0歳 (324人)	38.6		26.5	34.9
	1歳 (536人)	58.8		18.5	22.8
	2歳 (372人)	67.7		17.2	15.1
夫婦2人のための時間を確保するのが難しい	0歳 (523人)	19.7	34.4	45.9	
	1歳 (388人)	20.4	34.8		44.8
	2歳 (261人)	24.5	28.4		47.1
大勢の人がいるような公共の場所で、子どもの扱いに困る	0歳 (354人)	26.8	30.5		42.7
	1歳 (448人)	54.0		24.3	21.7
	2歳 (274人)	64.2		19.7	16.1
自分1人で過ごすスペースを確保するのが難しい	0歳 (429人)	36.1		26.1	37.8
	1歳 (328人)	40.2		24.4	35.4
	2歳 (225人)	48.0		31.1	20.9
夜泣きがひどい	0歳 (307人)	59.0		18.9	22.1
	1歳 (268人)	65.7		16.4	17.9
	2歳 (153人)	56.2		19.6	24.2
子どもを預かってくれる人を見つけるのが難しい	0歳 (287人)	27.2		31.0	41.8
	1歳 (247人)	21.5	36.4		42.1
	2歳 (165人)	33.9		30.3	35.8
夫婦2人で過ごすスペースを確保するのが難しい	0歳 (290人)	14.1	30.0		55.9
	1歳 (233人)	16.3	33.9		49.8
	2歳 (151人)	14.6	28.5		57.0
住居の間取りの使い勝手が悪く、家事や育児がしづらい	0歳 (293人)	53.9		25.9	20.1
	1歳 (185人)	54.1		24.3	21.6
	2歳 (108人)	62.0		20.4	17.6
家の中に子どもが遊べるスペースがあまりなくて苦労する	0歳 (243人)	41.2		30.9	28.0
	1歳 (137人)	37.2		30.7	32.1
	2歳 (85人)	47.1		27.1	25.9

注1) 「経験あり」の人のみ。「無答不明」は除く。

注2) イライラする=「非常にイライラする」+「ややイライラする」、イライラしない=「あまりイライラしない」+「イライラしない」。

この節では、0～2歳の子どもを育てる育児期妻が、どのような子育てに関する悩みを抱えているのかを取り上げる。また、育児期妻・夫が自分の子育てをどのように感じているかみていきたい。

● 子育ての悩みは子どもの年齢で異なる

育児期妻は、子育てに関してどのような悩みを持っているのだろうか。本調査では、14項目の悩みの中から、あてはまるものを複数回答で選んでもらった。子育ての悩みは、子どもの発達段階で異なるものも多いので、図2-3-1は、子育ての悩みについて、育児期妻全体と子どもの年齢別にまとめたものである。全体的には、「生活リズムが規則的にならない」24.7%、「○○ちゃん（子ども）の性質や性格が気になる」23.7%、「トイレトレーニングの時期・やり方がわからない」23.2%など、子どもの生活習慣や行動の特徴に関することが多い傾向にある。

子育ての悩みについて、子どもの年齢別にみると、0歳児の母親の悩みの上位4項目は、「生活リズムが規則的にならない」24.9%、「○○ちゃんの性質や性格が気になる」19.6%、「おもちゃや絵本の与え方がわからない」13.6%、「テレビやビデオの見せ方がわからない」11.8%であった。おもちゃや絵本の与え方、テレビやビデオの見せ方に関する悩みは、子どもの年齢が上がると減少していく傾向にある。

1歳児の母親の悩みの上位4項目は、「トイレトレーニングの時期・やり方がわからない」35.2%が突出して多く、以下「○○ちゃんの性質や性格が気になる」26.2%、「生活リズムが規則的にならない」21.3%、「言葉の遅れが心配だ」12.5%であった。1歳も後半になると、トイレトレーニングを開始する家庭が出てくる。また、発語に関しても早い

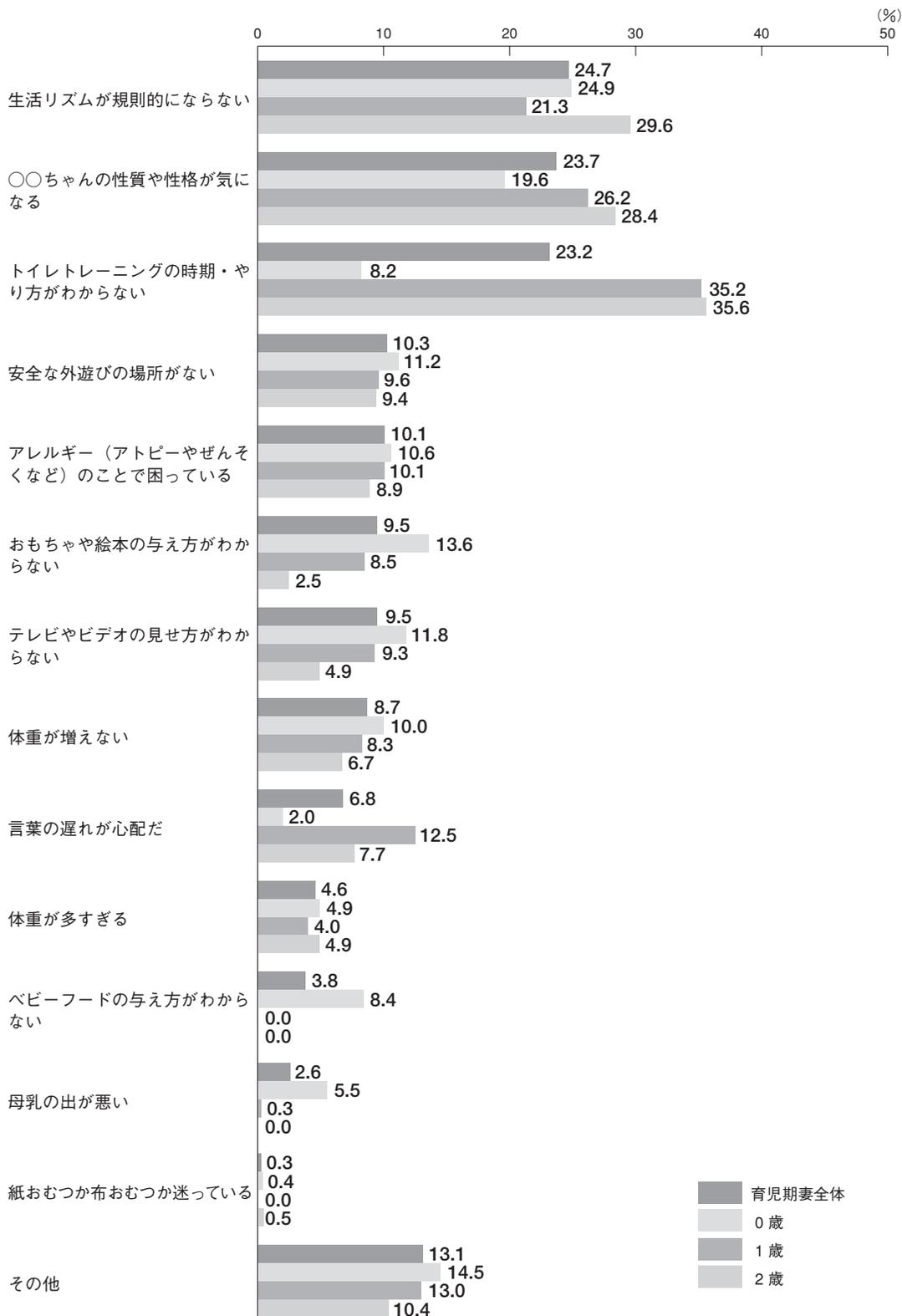
子、遅い子と差が出てくるために、こういった悩みが増えてくると推測される。言葉の遅れについての心配は、1歳でもっとも多くなっている。

2歳児の母親の悩みは、「トイレトレーニングの時期・やり方がわからない」35.6%が1歳児と同様もっとも多く、ついで「生活リズムが規則的にならない」29.6%、「○○ちゃんの性質や性格が気になる」28.4%、「安全な外遊びの場所がない」9.4%であった。外遊びの場所の不足に関する悩みは、0歳児、1歳児の母親もほぼ同様で10%前後が感じている。

子育ての悩みについて、託児施設や保育サービスなどに定期的に子どもを預けている人（335人）とそうでない人（1,509人）で顕著な差があった項目は、図2-3-2で示した、「生活リズムが規則的にならない」（預けている人16.7%、預けていない人26.4%）であった。定期的に子どもを保育サービスなどに預けている人のほうが、9.7ポイントの差で低かった。定期的に保育サービスに預けることで、起床や登園、食事、就寝などの生活リズムを作りやすいのかもしれない。

子育ての悩みについては、育児期妻の13.1%が「その他」を選択している。「その他」を選択した人の自由記述を子どもの年齢別にみると、0歳児の母親は、離乳食に関する悩みがもっとも多かった（110件の自由記述中、41件）。具体的には「離乳食がうまく進まない」「離乳食を食べない／食べ過ぎる」などである。他には、「夜泣き」に関する悩

図2-3-1 子育ての悩み（育児期妻、子どもの年齢別）



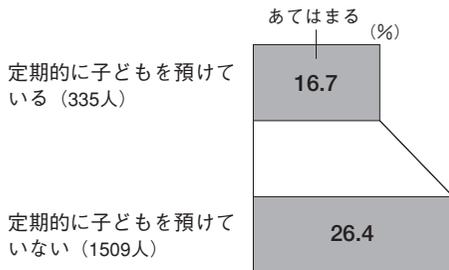
注) 複数回答。

み（13件）や、授乳のタイミングや卒乳などの「母乳・ミルク育児」に関する悩み（8件）が主なものである。

1歳児の母親の自由記述は、食事に関する悩みが多い（75件中、26件）。「少食、食べムラがある、好き嫌いが多い」などである。また、1歳は、離乳食が完了し、母乳・ミルク

をやめる子が多い時期でもあり、断乳・卒乳に関する悩み（11件）や、子どもへの叱り方やしつけ、指しゃぶりなどの癖の矯正など、子どものしつけに関する悩み（12件）もあった。2歳児の母親の「その他」の悩みでもっとも多いものは、1歳児と同様、食事に関するものであった（37件中、8件）。

図2-3-2 子育ての悩み「生活リズムが規則的にならない」
(育児期妻、定期的に子どもを預けている・いない別)



● 子育てに関する意識：7割以上が子育てに充実感を味わっている

本章では、これまで、子育てのストレスや悩みについて紹介をしてきた。ここでは、ストレスやさまざまな悩みを抱えながらも、育児期の妻・夫が、総合的に自分の子育てをどのように評価しているのか、みてみたい。

本調査では、育児期妻・夫に、子育て意識に関する8つの項目について、「あてはまる」から「あてはまらない」の5段階で答えてもらった。8項目は、2項目ずつが、それぞれ充実感、成長感、負担感、不安感を評価する構成になっている。

充実感は「子どもを育てることに充実感を味わっている」と「子育てが楽しいと心から思う」、成長感は「子育てに自信が持てるようになった」と「親としてそれなりにうまくやれていると思う」、負担感は「子育てのためにいつでも時間に追われていて苦しい」と「子育てが重荷に感じられる」、不安感は「子どもがうまく育っているか不安になる」と「子どものことでどうしたらよいかわからなくなることもある」である。

図2-3-3は、育児期妻の回答結果をまとめたものである。充実感に関する項目がもっとも多く、85.7%の妻が「子どもを育てることに充実感を味わっている」と回答している（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）。子どもの年齢別にみると、子どもの年齢で母親の自己評価に顕著な差があったのは、充実感に関する2項目であった（図2-3-4）。いずれも0歳児の母親がもっとも充実感を感じる率が高く、子どもの年齢が上がるにつれて下がっていく。0歳台は、特に身体的に顕著な成長がみられるので、母親の育児に対する充実感も高いのではないか。図2-3-3に戻り、妻自身の成長感に関する回答についてみると、充実感と比較すると肯定的な回答率は低い、「親としてそれなりにうまくやれていると思う」は52.9%が肯定している（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）。子育ての負担感については、「子育てが重荷に感

じられる」と思う人は少なく、13.3%（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）だったが、「子育てのためにいつでも時間に追われていて苦しい」は、「あてはまる」人（「あてはまる」＋「ややあてはまる」34.3%）と「あてはまらない」人（「あまりあてはまらない」＋「あてはまらない」34.4%）がほぼ同じであった。

子育てへの不安感については、41.2%が「子どものことでどうしたらよいかわからなくなることもある」と回答し（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）、48.4%が「子どもがうまく育っているか不安になる」と回答している（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）。はじめての子どもを持つ母親として、核家族化や少子化社会の下、出産前に子どもに触れ合う機会を持ちにくい一方で多くの情報はあふれ、先に述べたように子育てについてのさまざまな悩みを抱え、子どもの育ちについて不安を感じる人が約半数いるということである。

育児期妻については、仕事の有無で子育て意識をみてみたが、仕事を持っている妻と持っていない妻で差がみられたのは、子育てへの負担感に関する「子育てのためにいつでも時間に追われていて苦しい」であった（図2-3-5）。仕事を持っている妻のほうが、持っていない妻に比べて6.8ポイント、「あてはまる」＋「ややあてはまる」の回答率が高かった。小さな子どもを育てながら仕事をすする妻はいつも時間に追われがちであるということだろうか。

では、育児期夫の子育て意識はどうだろうか。図2-3-6は、夫の結果を示している。傾向は妻と同様であるが、「あてはまる」の結果を比較すると、肯定的な項目はいずれも妻より回答率が高く、逆に否定的な項目はいずれも回答率が低い。夫のほうが妻よりも、子育てに関する自己評価が高いということか。妻と夫で顕著な差があったのは、「子育てのためにいつでも時間に追われていて苦しい」という負担感をきいた項目である。妻の

34.3%に対して、夫はわずか12.6%であった（「あてはまる」+「ややあてはまる」で比較）。育児・家事の主たる担い手として、妻は、小さな子どもの子育てに追われ、前述のように自分のための時間が持ちにくく、ストレスを

感じている。核家族化が進行する中で、夫が育児参加しやすい環境を整えることは、妻のストレスを軽減するためにも重要だということがここに示されているといえる。

図 2-3-3 子育て意識（育児期妻）

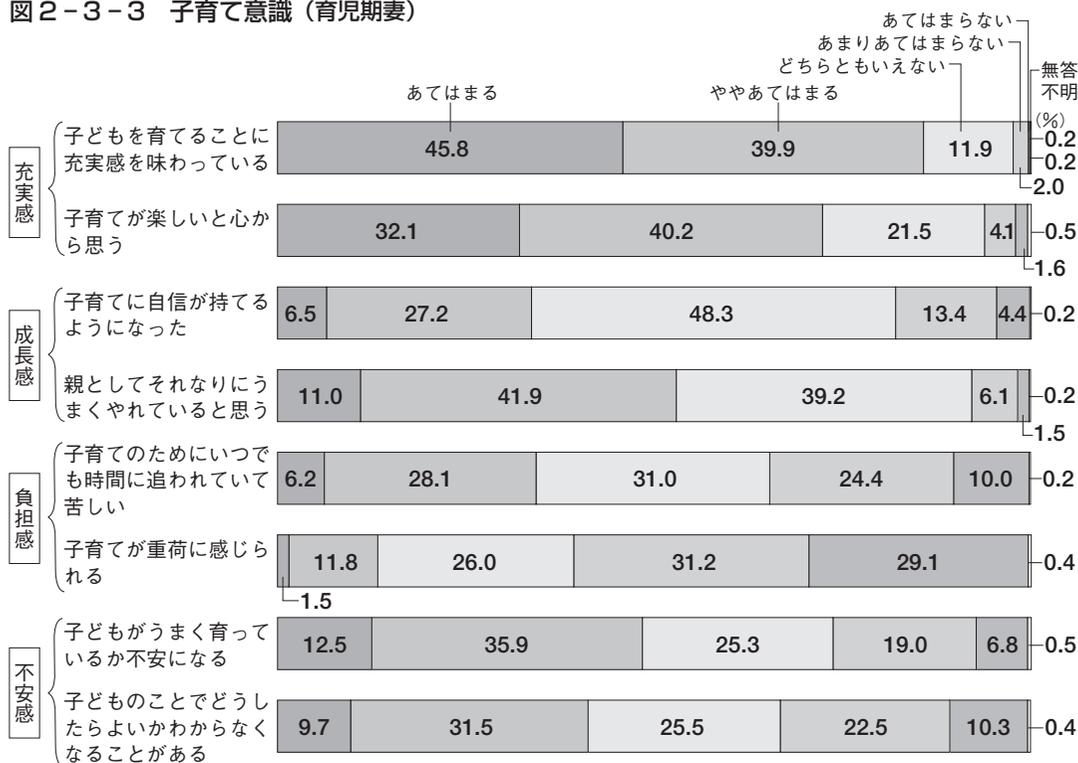


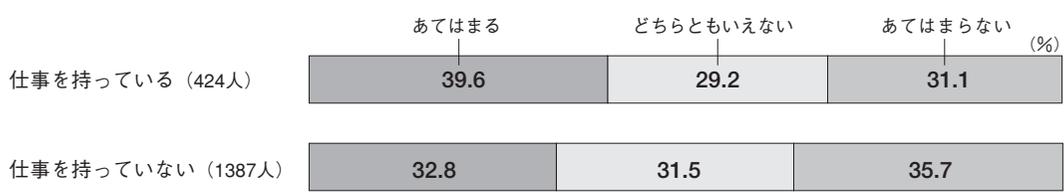
図 2-3-4 子育ての充実感（育児期妻、子どもの年齢別）



注1) 「無答不明」は除く。

注2) あてはまる = 「あてはまる」 + 「ややあてはまる」、あてはまらない = 「あまりあてはまらない」 + 「あてはまらない」。

図2-3-5 子育てのためにいつでも時間に追われていて苦しい（育児期妻、仕事の有無別）



注1) 「無答不明」は除く。
 注2) あてはまる = 「あてはまる」 + 「ややあてはまる」、あてはまらない = 「あまりあてはまらない」 + 「あてはまらない」。

図2-3-6 子育て意識（育児期夫）

